

■基調講演

超成熟社会の鍵は「女性」と「こども」
～女性の社会進出が組織を変える、社会を変える～

横浜市長 林 文子 氏



皆さまこんにちは。横浜市長の林文子です。今日は素晴らしい会にお招きをいただきありがとうございます。

私は男女雇用機会均等法施行の21年前に高卒で働きはじめました。1965年、昭和40年です。厳しい家庭環境を助けるために、高い倍率を乗り越えて就職したのに、当時は、男性と女性の仕事には完全に線が引かれ、女性の仕事は男性社員にアシスタントでした。女性の結婚適齢期は22、23歳で、仕事の辞め時とされていました。私は男性と同じように仕事がしたいと転職を重ね、31歳で車の営業と出会いました。ある日、我が家にいらしたあまり気の利かない営業マンがトップセールスだと知り、私にもできるのではと、ホンダの営業販売店に電話したのです。最初は「女性は無理」と断られました。が、「3カ月試用期間だけでも」とお願いして雇っていただきました。初めて名刺と営業用のカバンをもらった時は、一人前と認められたような気がして天にも昇る気持ちでした。朝からカバンと名刺を持って出かけ、1日100軒を目標に飛び込み訪問をして、夜の8時半ぐらいに営業所に帰る。アポなしで行きますから、ものすごく鍛えられました。

自分から心を開いて相手を受け入れる。そして、相手に関心を寄せてお話を伺う。そして褒める。オープンでアンテナを常に張りながらも、柔らかく受け答えできる。女性の持つ受容力、受け止める力は、営業に合っています。そして管理職にも向いています。私は、自分の体験を通じて、社長になっても「報連相(ホウレンソウ)は上司から」ということを実践し、ボトムアップとスポンサーシップで実績を上げてきました。男性中心の組織に女性が参画することで大きな成果が上がることを、身を持って証明してきました。

私自身の仕事人生を振り返り、少子高齢化の急速な進展、生産年齢人口の減少という社会情勢を考えた時に、これからは何としても女性に活躍してもらわなければならないという思いから、女性の社会進出を阻んでいる保育所待機児童の解消を重要政策の一つに掲げました。周囲からは、「受け皿を広げても就労希望の方が増えていたちごっこになる」「ゼロなんてありえない」と随分言われました。しかし、やり抜かなければと、私をトップとする「保育所待機児童解消プロジェクト」を立ち上げました。未就学児童の保護者で、現在働いてない方の7割が働くことを希望しています。しかし、87%の人はパートタイムを希望し、しかも週に3日か4日、1日4～5時間での就労を希望している人が大多数でした。つまり、それまでの保育サービスは、そうした保護者のニーズにフィットしていなかったのです。

そこで、一人ひとりと向き合い、きちんとお話を伺うことを大切にしようと、各区役所に保育サービス専門相談員「保育コンシェルジュ」を配置しました。もちろん、認可保育所を増やし、市の基準を満たした横浜保育室の認定・助成や、住宅やマンションなどの家庭的な環境で、少人数のお子さんを保育してもらおう家庭的保育も進めました。幼稚園での

預かり保育は実に 45%の幼稚園で実施していただいています。このように多様な保育の受け皿を設けて、一人ひとりのご希望に沿ってマッチングしていきました。

保育所の整備にあたっては、18 区長と話し合いを重ね、例えば、土木事務所の職員が、町で作業する際に土地探しをするなど、担当の枠を超えて全員で取り組みました。北海道から九州まで全国の民間保育所の事業者様に対して、横浜での事業展開を呼びかけています。民間企業もオフィスに保育園を作ってください、鉄道会社は高架下に、それから大学も作ってくれました。おかげさまで今春、待機児童を限りなくゼロにするという目標達成が現実的になってきました。総力戦でやらせていただいた成果です。それをコーディネートするのが行政の力ですし、皆様の素晴らしい力を見出しつなげていければと思っています。

保育所の待機児童の問題は、実は世界的な課題だったのです。私は、一昨年の APEC 横浜開催以降、APEC のサイドイベントである「女性と経済フォーラム」に参加しています。去年は Санктペテルブルグで、保育所待機児童解消の取組を含めて基調講演を行いました。するとロシアをはじめ各国の女性たちは興味津々でした。理念や方向性を語るだけでなく、これからは具体的な行動をしめし、成功事例を共有しましょうと訴え、多くの共感を得ました。今年 9 月にインドネシアで開催されますが、インドネシアの女性大臣が「是非やりましょう」とおっしゃっています。

また、働く女性たちがネットワークしていくよう“横浜女性ネットワーク会議”を開催しています。“F-SUS(エフサス)横浜”という女性起業家のためのシェアオフィスもつくりました。専任アドバイザーとして 3 人の女性中小企業診断士がサポートすることで、スタートして 2 年弱で 24 人が起業しました。このように女性活躍のために、懸命に取り組んでいます。

私は就任以来、“おもてなしの行政サービス”を掲げて、市民の皆さんの信頼を得ていくためには現場が一番大切だと、窓口の職員に訴え続けました。行政の窓口いらしたお客様に、「いらっしゃいませ、ありがとうございました、お気を付けてお帰りください」と一言添えて、と言い続けています。私たちは一人ひとりの人間ですから、感情で生きています。市民の皆様は信頼なくして、どのように良い政策を打ち出しても評価は得られません。おかげさまで、窓口満足度調査で、昨年 11 月末に 96.6%の方から「満足」「やや満足」との評価をいただきました。調査会社の方も驚いて「ありえない」と言っていました。市長の命令一下皆が動くというのは幻想です。職員が、仕事に誇りを持って、人のためになることが幸せだと実感しながら、いきいきと働けるからこそ成果にはつながるのです。“おもてなし”は、する方とされる方双方が幸せになる関係です。実現不可能と思われた保育所待機児童解消も、お困りの市民の方に寄り添い、喜んでいただきたい、それが職員にとっても喜びだという関係ができたからこそ、自治体、NPO、民間企業の皆様とご一緒に取り組むことができたのです。

これからも今日お集まりの皆さまが素晴らしいネットワークをつくれ、子どもたちの幸せのために取組を進んでいただければと思います。